

負け

史実負海舟

第一話 ペリー来訪

雨戸から差し込む強い日差しに焼かれ、渋々と片肘を付いた。全身は火照り、汗でふやけて畳の跡が赤く残っている。南東に位置する六畳間は日当たり良好。七月の凶暴な太陽が惰眠を妨げる。嘉永六年、江戸の夏。

まったく梅雨だというのに、今年は一向に雨が降らない。市中では、水不足と米の不作が囁かれている。今日は一日、非番である。腫れぼったい目は涙まじり。ぐらつく視界によろめき、何とか土間まで辿り着いた。リフレイジレーターからバドワイザーの壘を取り出す。よく冷えている。どっかと腰を下ろし、栓を抜く。一口。

内の蔵を稲妻が一閃。覚醒した。

今月、メリケンから懐かしい友人が訪ねてきた。ペリーだ。カジュアルな場ではマシュー、カイシューと呼び合う仲である。船を寄せた浦賀の港は大騒ぎの野次馬、諸藩では尊皇攘夷の五月蠅い輩が徒党を組んで、不穏な動きを見せていた。

実のところ、ペリーは幕府へ内通していた。浦賀に訪れるところまでは筋書き通りだったのだ。しかし野郎、一言の挨拶もなくおどろおどろしい黒船とやらを乗り付けて、威嚇を始めやがった。当初の予定では、お座敷の一席でも設けて無事平穏に済ませる腹つもりだったのだ。江戸幕府の鎖国政策は限界である。二百数十年の太平を経て、制度の疲弊は誰の目にも明らかであった。幕府が既得権益を守るため、諸外国との友好関係を築く事が唯一の延命策であった。話が違わないか。俺の工作が水の泡だ。掌を返し、力で押さえつけようとするメリケンの、ペリーのやり方に憤慨していた。

土間の片隅に目をやった。今にも崩れそうなほど、バドワイザーの壘が積み上げられている。攘夷論が吹き荒れるこの街で、これらを『燃えないごみ』の日に出すわけにはいかない。

実のところ、俺は開国論者である。二つ名を「K(ケイ)」という。開国論者のK、海舟のKからあやかっただ。実生活でKの名を呼ばれることはない。暗躍の場はインターネット、ミクシイだ。匿名である。俺は幕府の要人なのだ。胸中を暴かれれば、文字通り首を切られる。

バドワイザーを好むのには理由があった。俺の北の政所はメリケン人。名をスーザンという。出会いはビバリーヒルズのパブであった。彼女はバドガールとして店内を闊歩していた。白い肌に吸い付くような衣装、魅惑の四肢に、心を奪われた。彼女を口説き落とすのに時間はかからなかった。俺は誠意大將軍の懐刀。お勤めも色恋沙汰も、誠意の貫き方は心得ている。

しかし、スーザンとの幸せな暮らしは長く続かなかった。わずか半年間のメリケン滞在、必死の思いで逢瀬を重ねた。江戸において彼女は蛮人、共に住まうことなど許されないのだ。残された僅かな時間を忘れようと、二人は激しく愛を育んだ。いよいよ別れの時、そっと俺の耳元で囁いた。子どもができたの、あなたのベイビーよ。彼女の潤んだ瞳を目の当たりにして、その瞬間から、俺はKとなった。開国論者の道を選んだ。

産まれたのは女子（おなご）であった。未だ会えていない。しばしばスウザンが活劇を撮影しては、ユー・チューブに投稿をしてくれる。黒髪だが、母親譲りの透き通るような白い肌、緑色の眼。通信記録から足が付くため、直に連絡を取ることができない。国際電話も電子矢文も、スカイプも使えない。俺は幕府の要人、一挙手一投足さえも筒抜けなのだ。

「あれより…あれより三年も、経ち侍り。」

やれた気分二本目のバドワイザーを取り出そうとして、誰かが戸を叩いた。幕営放送の集金か、近頃は自邸にまで押しかける外様大名の陳情か。対応するのが億劫に思われたが、どちらも違った。

「負さーん、宅急便ですー。」

第二話 猜疑

配達人と思しき人物が、二度、三度、戸を叩く。

背筋を張り、耳を澄まし、戸外の様子を伺う。身に覚えの無い宅急便。迂闊に対応すると、立っていたのは瓦版の拡張員だという噂を思い出した。口八丁手八丁、各種チケットや洗剤などの欲望をちらつかせ、言葉巧みに契約へ誘う。無料（タダ）ほど高い買い物はない、とは真理である。よもや攘夷の連中かも知れぬ。奴らは天誅と叫べば人を平気で切つてよいと思っている。阿呆である。後者の予想が当たっていれば、俺は討ち死にするのだろう。二度とスーザンに会えない。子にも会えない。考えること、この間5秒。胸中で呟いた。

「出ぬぞ。」

四度目、五度目。戸を叩く。あんれえ留守かと間の抜けた声が聞こえる。騙されるなよ、海舟。これは謀なのだ。

仮に、本当に宅急便であったとしよう。俺は明日から五日連続勤務。お勤めは早朝から深夜に及ぶ。荷物を受け取ることが可能な時間は不在であるが、方法がないわけではない。近頃はコンビニ受け取りという便利なサービスがある。これは杞憂ではないのだ。慎重こそが最良の自衛策なのだ。

待て。待てよ。荷物が新鮮なナマモノであった場合はどうするのだ。例えば岩牡蠣のような。夏場の牡蠣には十分に気を払わねばならない。もとより寄生する大腸菌はごく僅かであっても、時間経過により増殖を続け、食中毒のリスクが増します。新鮮な岩牡蠣本来の味を楽しんでいただくため、加熱殺菌処理は施しておりません。万が一お客様の健康を害する事態を生じた場合でも、一切の責任は負いかねますので十分にご注意ください。

コンビニ受け取りはクール便に対応していない。計画は瓦解した。なんたることだ。思わずあげかかった声を飲み込んだ。たちまち二択に追い込まれた。危険を承知で戸を開けるか、好物の岩牡蠣をみすみす諦めるか。思考が巡らない。ただただ冷たい汗が滲む。焦る。

もう戸を叩く音は聞こえてこない。そろそろ配達人は諦め、不在通知票を残して帰ってしまう

だろう。そら、足音が聞こえる。遠ざかってゆく。

時間がない。

間に合わない。

決断するのだ。

覚悟を決めた。思い切りよく立ち上がり、引き戸を開け、腹に力を込めて言い放つ。

「あいや、待たれい！」

戸口から身を乗り出した途端、視界を失った。背後から頭巾のようなものを被せられたらしい。振りほどこうと両手をあげたところで、羽交い締めにされた。前方から、みぞおちに打撃を受け（おそらくは、配達人が翻り放ったジャンピング・ニー）、堪らず前のめりになったところで、頸椎に重い衝撃が走った。薄れゆく意識の中で、もう一人の俺が囁いた。それ見たことか…。

幼少の頃からそうであった。俺は何事にもよく考え行動するのだが、築き上げたロジックが崩れると、慌てふためき、衝動的に行動してしまう。六つか七つの幼き頃、同年代の友人の間ではおなごの着物めくりが流行していた。土道に悖ると考えていたが、ある日気付いてしまった。着物めくりが許されるのも小童であるからこそ。分別が付く年頃になれば、そのような行動は許されない。社会的信用を失う。このままでは、俺は一度たりとも着物めくりを成し遂げた経験が無いままに、元服を迎えてしまう。当節、齢十四。俺はやってやった。報せを聞いた母上は泣き崩れ、父上は啞えたキセルで俺を殴り倒した。三人揃って着物めくりを仕掛けた相手の屋敷へ出向いたのだが、謝罪の最中も俺は昂ぶる達成感と、荒ぶる下半身を押し付けることに難儀していた。

そんな遠い過去を夢に見ていた。江戸城のほど近くに位置するこの官舎で、俺が目覚めたのは、とっくに日が暮れ、日付も変わろうとしている子の刻であった。